

審査結果の要旨

(1) 研究の目的に意義や独創性があるか。

本研究では、学習者中心のディープアクティブラーニング（深い学習）を促すために、「内化・外化」及び「授業外・授業内」の2観点から、輪読式学習における学習活動の構成を改善することを目的とし、ICT活用及び可視化支援を取り入れた反転輪読の授業を設計・実践し、その効果の検証を行った。この実践から得た知見に基づき、学習内容の①授業外の内化、②授業内の外化、③授業内外における内化と外化の学習サイクルの関係を明らかにし、それらを促す方法を探究することで、学習者中心のディープアクティブラーニングのモデルの精緻化を企図したものである。本研究は主体的で深い学習に関して、実践に基づくデータからその実質化の基礎を築こうという目的で実施されており、大きな意義と独創性が認められる。

(2) 研究の方法は当該学問分野において妥当なものか。

本研究では以下の4つの実践研究が行われた。それぞれ実際の授業実践と受講者を対象としたデータを資料としている。実践研究1では、輪読式学習と学習者中心のディープアクティブラーニングの関係について、オンライン学習と反転学習の授業手法を実施し、効果検証した。実践研究2と3では、輪読式学習の授業外の内化を対象とし、音声発表を取り入れた反転輪読実践について効果を検証した。実践研究4では授業内の外化の手法として可視化支援を取り入れた反転輪読を実践し、その効果を検証した。いずれも受講者への質問紙調査及び半構造化インタビューを実施し、効果検証の資料としている。いずれも実際の講義を対象とした実際の教育実践における調査研究であり、受講者にとって不利な統制群を設定しない等適切な倫理的、教育的配慮がなされている。アンケートの統計的処理、インタビューの質的データの取扱いとも、当該学問分野における標準的な手続きに基づいた妥当なものであった。

(3) 研究資料やデータの収集と分析が適切になされているか。

実際の授業を対象としているが、質問紙調査やインタビューについての倫理的配慮について明確に説明されている。調査協力と授業の成績評価には一切関係がないことや、調査協力は任意のものであり、協力しないことによる不利益がないこと、回答したくない場合には白紙で提出してよいことを説明した上で実施しており、質問紙調査は適切に行われたと考えられる。アンケートについても目的に応じた適切な解析が行われている。以上のように、研究資料やデータの収集と分析に関して、質的及び量的な手法を駆使し、授業の効果が客観的に記述、分析されている。各手法は学術的に適切に使用されており、また教育実践の記録として倫理的な配慮に基づいた上で、今後検討しやすい資料性を持っていると判断した。

(4) 研究の考察と結論が妥当であり、学術的な水準に達しているか

本論文は、序論（研究背景、理論、目的）、4つの実践研究、結論から構成されており、学習者中心のディープアクティブラーニングにおける「内化・外化」及び「授業外・授業内」の観点から、輪読式学習における学習活動の効果を明確化し、授業構成の改善が提言された。ディープアクティブラーニングの観点を取り入れた実践の必要性が、学術的な水準を備えた客観的なデータに基づき、考察され、結論付けられていると判断された。

(5) 取得学位にふさわしい意義や成果が認められるか

高等教育の大学院生の少人数の授業を対象とし、適切な研究的、倫理的、教育的配慮に基づき、実際の授業実践を計画、実施し、学習者中心のディープアクティブラーニングの効果測定からモデルの精緻化がなされていた。またこの研究から、異なる学習目標、異なる学習者の状況や意欲、主体性への配慮等に応じてモデルの調整の必要があることが明確化された。以上のことより、審査委員会では全員一致で、本論文が博士(教育学)の学位にふさわしいものであると判断した。